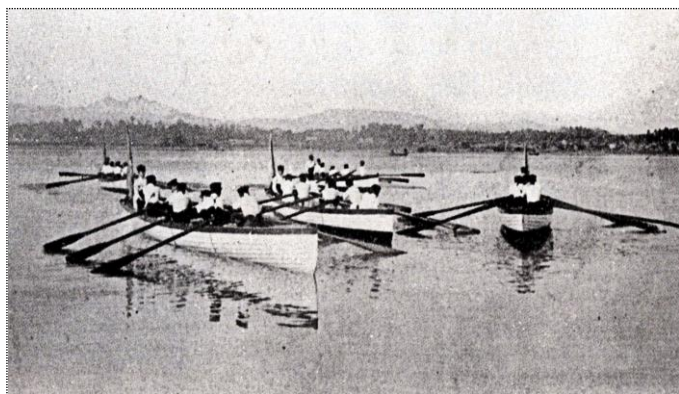




進修同窓会HPにアクセス



1907年に進水した土浦中学の5隻のボート

同年11月24日に撮影されたと思われる写真。橋本たちもこのボートで鹿島遠漕に挑んだ

霞ヶ浦遠漕……1909 [明治42] 年の鹿島遠漕 1

休日を利用して筑波山に挑んでいた土中生ですが、1907年に5隻のボートが進水すると、尾崎楠馬先生のご指導宜しきを得て、ボート熱が一気に高まり、霞ヶ浦遠漕を試みる生徒も出てきました。今号から、5年生橋本芳雄(中9回)の「鹿島遠漕記事」(1910年1月発行『進修第13号』所収)で、霞ヶ浦に挑んだ生徒たちの姿を描いていきます。また、同行の尾崎先生も、ご自身の日記にこのことを記されていますので、併せて紹介します。《 》内は尾崎先生の日記で、引用文中の【 】内は筆者による注記です。旧字体は新字体に改めました。

なお、遠漕の航路図を進修同窓会HPの『月刊Acanthus』第175号3頁に掲載しています。

尾崎楠馬先生 (国語、在職1907～1911年)



尾崎楠馬先生

本校校歌の作曲・補筆者である尾崎楠馬先生は、1878 [明治11] 年10月、高知県安芸郡のお生まれ。高知尋常中学校を経て、1900 [明治33] 年4月、高知県師範学校本科(高知大学教育学部の母体の一つ)を卒業し、芸陽高等小学校に奉職されました。1903年、東京高等師範学校(後の東京教育大学、現筑波大学)に入学し、1907年3月、同校本科国語漢文部を卒業、4月に茨城県立土浦中学校に赴任されました。

尾崎先生は、高等師範学校卒業時に、校友会会長嘉納治五郎(注)先生より表彰されたのに加えて、同会短艇(端艇。ボート)部長・同会游泳(水泳)部長よりそれぞれ賞を受けるなど、文武の道を究められました。この尾崎先生の人物像を、土浦中学で出会い、盟友となった小田原勇先生(国語、在職1906年～1907年)は、次のように記しています。

「多芸多才の才人

霞ヶ浦を眼下に遙か西の方筑波を見はるかす真鍋高台の土浦中の教壇に立った白面の青年教師は、五分刈り頭に浅黒い顔、別に娑婆気も洒落気もなく、気取ったところなど微塵もなかった。ただ不屈の意志の閃き【ひらめき】と、時あって紫電【しでん 鋭い眼の光り】迸る【ほとばしる】力を深淵の底に秘めた双眸【そ

うぼう 左右両方のひとみ。両眼】だけが異色であり、鼻下の黒い美髯【びぜん 立派なひげ】のみが異彩を放っていたに過ぎなかった。

人に接しては温厚、礼儀正しく、時あっては諧謔【かいぎやく 面白い気の利いた言葉。しゃれ。ユーモア】を弄し笑わせたが、一面犀利【さいり 堅く鋭いこと。転じて、文章の勢い、頭の働きなどが鋭いこと】鋭鋒【えいほう 鋭く攻め立てる、その勢い。転じて、言論などによる鋭い攻撃】人の肺腑を抉る【えぐる】辛辣【しんらつ 極めて手厳しいこと】な毒舌もあり、虫が好かぬとなれば絶対に胸襟を披く【きょうきんをひらく 心中を打ち明ける】人ではなかつたし、殊に清廉潔白で曲がった事は秋毫【しゅうこう いささか。僅か(わずか)】も仮借【かしかく 見逃すこと。許すこと】しない厳しさがあつた。

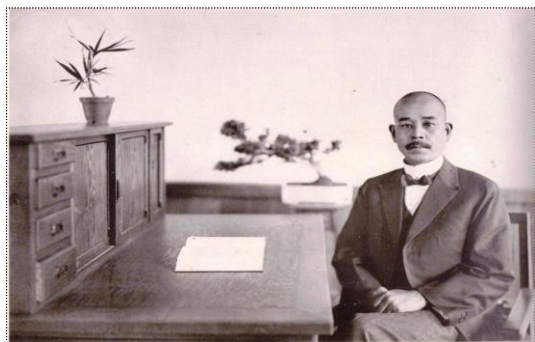
稀に見る学殖人格に加うるに運動は高師の端艇の選手であり、庭球も堂に入ったものであつた(但し、野球だけは食わず嫌い一顧もされなかつた。これが後日見【静岡県立見付中学校、現静岡県立磐田南高等学校】に野球が育たなかつた因をなしている)。それに音楽に堪能で、オルガンを巧みに弾き唱歌をよくするのは不思議でないとして、長唄端唄俗曲詩吟何でもござれで、聞く者をして美声妙音に恍惚たらしむるものがあつた。かの大字典編集の偉業を完遂した同郷の盟友栄田猛猪氏の「大字典」跋記に、『余が終日筆を握り、気餒え【うえ 飢え】胸痛み憂鬱遣るに由なき時、忽ち来たりて詩を吟じ思いを據べ【のべ 述べ】、以つて余を慰め余を勞り【いたわり】しは、余が二十年来の心友尾崎楠馬君なりき。』と書かれてある。瞑目【めいもく 眼を閉じること】すれば凜々たるあの吟声

が天の彼方から静かに流れ来たるよう
で胸迫る思いがする。

文筆の才に驚嘆したのは見中時代のことであつた。「(尾崎楠馬先生遺稿集刊行会刊『尾崎楠馬先生遺稿集』「尾崎先生の片影」)

尾崎先生は、授業の傍ら、小田原先生と10周年記念事業の新艇建造・艇庫建設に奔走し、生徒たちには漕法や楽団の指導、夏休みの水泳指導(注)、と八面六臂(はちめんろくべい 八つの顔と六つのひじ。転じて、一人で数人分の手腕を発揮するたとえ)の大活躍をされています。

1911年7月、尾崎先生は、土浦中学校から東京府青山師範学校(東京学芸大学教育学部の母体の一つ)に転じ、1917 [大正6] 年には静岡県浜松師範学校(静岡大学教育学部の母体の一つ)教諭に任ぜられました。1922 [大正11] 年、静岡県立見付中学校の初代校長を拝命すると、三顧の礼を尽くして、朝鮮龍山中学校(ソウル特別市の現龍山高等学校)教諭をされていた小田原先生を教頭に招聘されました。



見附中学校初代校長 尾崎楠馬先生

二人は、見付中学校創設を機に校友会として、真の人間教育を目指して協力、奮闘し、見事な成果を挙げられました。



小田原教頭と小田原山

「学園は自分たちでつくる」の合い言葉の下に「師弟同行」、先生も生徒も一緒に汗を流し、学校建設を成し遂げる中で、見付中学の基礎が築

かれ、建学の精神が創り上げられました。その精神は「下力中精神」・「見中魂」と語り継がれ、両先生は、見付中・磐田南高の同窓生や在校生・地域の人々の尊崇の的となっています。同窓生たちは、お子様の無かった尾崎先生の50年忌法要を営み、現在も墓守を続けています。校門前には、20年間校長を務められた尾崎先生の頌徳碑を建て、「師弟同行」で造り上げた防風堤の一端の「小田原山」と呼ばれる高所には、小田原先生の顕彰碑も建て、お二人の功績を讃えています。

嘉納治五郎

講道館柔道の創始者。1893「明治26」年より通算25年ほど東京高等師範学校の校長及び東京高等師範学校附属中学校（現筑波大学附属中学校・高等学校）校長を務めた。

水泳指導

当時の土浦中学校では、夏休みに霞ヶ浦田村弁財天下で水練（水泳訓練）が実施されており、尾崎先生が古式（日本）泳法の指導に当たっていた。田村弁財天下までは、川口の艇庫から、参加者が分乗してボートを漕いで行った。

日本で近代4泳法（クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ）が普及したのは、大正末期から昭和初期に掛けるのである。

下力中精神

尾崎校長は、小田原教頭とともに、自発的、能動的な労作すなわち勤労作業を中心原理として、生徒の人格形成を目指す「労作教育」を目標に掲げ、運動場の整備や防風堤・プールなどの全ての造営を、生徒たちと教師によって行っていた。他の学校の生徒からは、「土方」とかた土木工事に従事する労働者。土工「作業の「下力中」と呼ばれ、保護者からも、「上の学校に進学させるためにこの学校に入れたのに、土方仕事ばかりやらせてこのクレームも寄せられたが、第一回卒業生から、次々と優秀な上級学校への合格者が出て、その成果を証明した。この勤労作業によって培われた不撓不屈の精神が、「建学のこころ」となり、「下力中精神」と呼ばれるようになった。

なお、尾崎先生と小田原先生との土浦中学での出会いと別れ、見付中学での再会、学校建設については、本紙第22号で詳述している。

鹿島遠漕記事 橋本芳雄

1909年7月24日から実施されていた田村弁財天下での水泳訓練は、二週日の間、炎天の下に河童の仲間入りした効果頭はれて、十町【約100m】渡の試験も無事済んだ八月七日、一同芝の上に休んで居るとさて愈【いよいよ】明日で水泳も終はる、所で一同遠漕は如何【いかが】かと尾崎先生の発議。恰【ちょうど】。あたかも僕等の希望であつたので、忽ち【たちまち】賛成々々と叫んだ。然らば何処が好からうと云ふ問題になつた。やれ佐原が好からうと云ふは如何だ、浮島【一週】は面白いではないかなど云ふ議論が出たが、結局鹿島がよからうとの事になつた。是は即ちその日記である。

浮島

現在の稲敷市の北東部の、霞ヶ浦に浮かぶ島であったが、1960（昭和35）〜1966年に掛けて干拓が行われ、現在では陸続きとなっている。常陸国風土記「信太郎の条に、「乗舟のりはまの里の東に、浮島の村あり。四面絶海（よもぎ）にして、山と野交錯（まじ）れり。戸（い）こは一十五烟（こ）とおあまりいつ、田は七八町余（し）ちちとこあまりなり。居め（す）める百姓（お）おみたら、塩を焼きて業（なり）わいと為す（な）す。」とあり、古くは製塩も行われていた。

八月九日（第一日）。

《午前四時起床朝食を終え五時【川口の】艇庫に行く来れるもの僅かに三人更に待つこと少時二人を残して皆来る》



川口艇庫

今日は愈遠漕の当日なので、前日の規約【関係者間で相談して決めた約束】の頭大の【握り飯の】弁当と米一升とを腰にぶら下げて川口に行つた。夜は漸【ようよう】明け放れて、真紅の太陽が湖上に姿を現はし、岸辺の蘆に宿る露がキラキラと輝き始めた。やがて人員も揃つたので、霞校の二艇を下し左の如く乗組員を編成した。

「桜」尾崎先生、渡辺、塚本、黒岩、山本、飯塚、中野、野口、岩沢「霞」舟本氏【尾崎先生の従弟の船本昇、同晋のいづれかと思われる】、川澄、川井、橋本、伊藤、須田、中島、鈴木、関谷

午前六時、川口出発。僕等は此壮快なる首途【しゆと】出立すること。旅立ち【に】就いた。二艇は静かな湖上を勇ましく蹴破つて行く。今日は、風無く波無く周辺のもの、皆逆様に影を写して居る。田村の弁天の前で待つて、居つた野口君を載せ【乗せ】、二艇は相並んで進んだ。

《六時出発野口を田村弁天社に向へ【迎へ】直ちに出発》



田村弁財天

沖宿が緑なす木立の間に、白い壁やら茅葺【かやぶき】の屋根やらを見せ、それがすつくり水に写る。年老いた爺婆が網を打つて居た。絵本で見た桃太郎の両親によく似て居る。洗濯も済み柴も随分取つたので、今日は可愛い息子に、魚なりと食べささうと二人で出て来たらしい。

沖宿からは、対岸【美浦村大山】の大山鼻を目懸けて突進した。今日は元気に充ちて居る為か、川口から田村までやつとの僕でさへ中々漕げる。茲に【ここに】勇氣百倍して大いに漕いだ、元より十や二十の肉刺【まめ】は、覚悟の前【前も】って心構えのできて居ること。覚悟の上【だ】。尚も漕ぐ中に鼻はだん／＼近づき、木や家がよく見える、か【が】中々行けぬ。皆大いに腕を振つた。やがてオール、フロ【漕ぐのを止め、艇を流れて任す】。皆汗を拭いた、軟い【よわい】風がソヨ／＼と頬を撫でた。已に鼻は越して居た。《此日風収まり波風【なぎ】て湖面鏡の如く二艇相並び【ならび】て進む》大山岬を廻る頃烈日激しく焼くが如し》（高21回 松井泰寿）

アカンサス第175号「鹿島遠漕航路図」 → (本文中に登場する地)

